



国際基督教大学 (ICU) ・学長

日比谷 潤子

多様性と対話の尊重によって 一人ひとりの可能性を引き出し 自らも成長を続ける“未完の大学”

私の視点 — 課題をこう捉える —

均質でない教員構成が グローバル教育を支える

グローバル教育を行う大学は、単に外国籍や外国で教えた経験のある教員の割合が高ければいいわけではありません。均質ではないさまざまな教育的背景を持った教員で構成されることに価値があると考えています。

本学は日米の方々からの寄付によって設立され、開学当初から日英両語を学内公用語としてきました。多国籍で多様な価値観を持った教員で構成され、最近では中東欧の出身者が増えて

います。残念ながらアフリカと南米からの教員はまだいませんが、いずれこれらの国からも受け入れるでしょう。多くは母国のみならず他国の大学の学位も取得しており、その点でも多様性があります。

異なる背景や価値観を持つ同僚と議論をしていると、それまで当たり前だと思っていたことが、必ずしもそうではないことに気づかされます。こうした環境の下で、学生の「常識」を揺さぶって刺激を与え、責任ある地球市民として生きていける人間に育てることこそ、グローバル教育だと思います。

グローバル化の影響は大きく、「日本の常識」とされてきたことが国内においても通用しなくなるケースが、今後増えていくのではないのでしょうか。

価値観が異なるからこそ 言語化して説明・交渉

本学は教職員と学生を合わせても約3000人の小さな大学です。大規模大学に比べればガバナンスが効きやすいと思われるかもしれませんが、多様な価値観が混在するため、さほど簡単ではありません。

ガバナンスとは、方針を組織全体に

くまなく行き渡らせるようなものではなく、考えや思いが異なる人たちと共に1つの方向に進む精神を醸成するものだと考えています。ですから、対話することを意識しています。

モビリティが高い“越境者”たちは、「世の中に当たり前はない」ことをよく知っています。それゆえ、相手が自分の考えを当然視していないことを前提に、言語化して確認しながら交渉し、物事を実行に移していくのです。自分とはまったく逆の考えを相手を持っている可能性もありますから、一から順序立てて丁寧に説明する習慣が身に付いています。そんな彼らと仕事をしていると、一人ひとりと対話することの重要性に気づかされるのです。

対話と交渉によって物事を進めてい

く精神こそが、グローバルで多様性のある大学におけるガバナンスの要諦です。本学がこの規模だからできることであり、大学によってガバナンスのあり方はさまざまだとは思いますが。

対話の大切さは教員間だけの話ではありません。教育の場として、私たちは学生一人ひとりを大切にしています。多くの教員や学生が構内に住んでいるため、お互いの垣根が低く、日常的に自由闊達な会話がなされていることも、本学の特徴と言えます。

世界中から学生を集め 選ばれ続ける大学に

将来にわたって選ばれ続ける大学とは、海外の人から見ても魅力的で、そこで学んでみたいと思われるような大

学だと思います。そしてそれは、世界中から集まった教員や学生の持つさまざまな教育的背景が混ざり合い、知識が統合されていく、そんな大学ではないでしょうか。

本学では日英両語で授業を行っています。英語を使いこなせるバイリンガルで十分だとは思いません。もう1つ以上別の言語を習得したほうが望ましいわけですが、優れた教育のためには、財政基盤の強化が課題です。アメリカの私立大学のように高額な学費をいただくことも考えられますが、わが国ではまだその選択肢はないようです。教育に対する理解を得て、後輩たちの育成を支援していただけるよう、卒業生に本学のミッションを伝え続けていくつもりです。

国際基督教大学の改革

創立時の宣言を 現代的に再解釈

本学の創立時、湯浅八郎初代学長は、「永遠に未完の大学」として「明日の大学」をめざすと宣言しました。

それを受けて、私は学長就任式で「一人ひとりの可能性を最大限に引き出す大学」「構成員それぞれが自らの使命を見出せる大学」「理想を求めて成長し続ける大学」の3つの「教育ビジョン」について述べました。これが私の描く大学像であり、本学のミッションの現代的解釈だと考えています。これらのビジョンに基づいて大学改革を進めているところです。

2015年度入学試験から、一般入試に「総合教養」(ATLAS)を導入します。大学の講義に限りなく近い録音内

容を聴き、設問に答えてもらいます。志願者を選抜するのではなく、志願者が本学で能力を伸ばせるかどうかを見るための入試であり、高校教育で培われるリベラルアーツの素養を確認しま

す。高校でここまで勉強してきたほしいというメッセージでもあります。

また、入学金と年間授業料等の一部を免除する「ICU High Endeavor奨学金」を2015年度から設けます。受験

3つの教育ビジョンと実現に向けた8つの施策

一人ひとりの可能性を最大限に引き出す大学

- 1 教学改革の評価と改善
- 2 ICU が目指すリベラルアーツ教育にふさわしい学修環境の整備と安全の確保
- 3 入学者選抜制度の総合的検証と改革
- 4 本学にふさわしい教員の任用と育成

構成員それぞれが自らの使命を見出せる大学

- 5 構成員間のコミュニケーションの円滑化
- 6 多様な留学制度の構築

理想を求めて成長し続ける大学

- 7 学生宣誓の実質化
- 8 財政基盤の強化

生が経済的な理由で受験をあきらめなくていいように、奨学金を充実させます。これらの新しい入試や奨学金の制度で多様な学生を受け入れます。

入学後にメジャー（専修分野）を決められることを柱にしたカリキュラム改革を2008年度に実施し、今はその検証段階です。学生調査などを通して成果を確認し、改善していきます。

海外の大学と連携を深め リベラルアーツを強化

リベラルアーツといえばアメリカの大学というイメージがあるかもしれませんが、最近ではアジアや中東、ヨー

ロッパにも増えています。これら世界の大学が共にリベラルアーツ教育の将来を考えようと、2008年に「グローバル・リベラルアーツ・アライアンス」が設立され、本学も2014年に加盟しました。加盟できるのは小規模大学のみで、学生と教員の比率や英語による授業の実施など、一定の条件が課せられています。

このアライアンスの中でカリキュラムの共同開発・運用、留学を推進し、教育を充実させる方針です。これまで以上にイスラム圏や西アジアの大学とも連携を深めていきたいと考えています。

5～7年後をめどに キャンパスを再開発

キャンパス再開発も課題の一つです。施設の耐震工事は完了しましたが、いくつかの施設は老朽化し、使い勝手が良くありません。今日の教育に合ったものに変えようと検討しているところです。景観に配慮し、キャンパス全体を再開発します。学生にとっては生活の場でもあり、留学生受け入れにおいても重要な空間です。東京オリンピックの影響で見通しが立てにくい状況ですが、5～7年後には再開発を終えたいと考えています。

トップの横顔に迫る

文法オタクの少女

中学生の頃から英語が好きでした。興味の持ち方が少し変わっていて、文法、特に言葉の規則性に引かれました。英語だけでなく国語の文法も好きで、ほとんどの人が見向きもしないような「活用」には血が騒いだものです。

「これが文法」というものがあるわけではなく、言語の現象があってそれをどうやって構造化するかが文法。ざっと文を見たときに、すばらしい規則性があることに気づいて、私のようにそこに関心を持つ人が言語学者になるのだと思います。

大学に進んでからは、英語は当然学ぶものとして、それとは系統の異なる言語であるフランス語を専攻しました。文法や音声を研究する言語学を知って興味を抱くようになり、大学院

では言語学を専攻しました。留学したアメリカのペンシルベニア大学ではPh.D.の取得に加え、TA（ティーチング・アシスタント）という貴重な経験ができました。

尊敬する人物

アメリカの名門女子大学・スミス大学の学長を務められたジル・カー・コンウェイ氏を尊敬しています。来日された際にお会いしましたが、とにかく人を包み込むような人柄でした。

2冊の自伝を読むと大学のリーダーへの道程がよくわかります。1冊目はオーストラリア人である彼女が困難を乗り越えてアメリカの大学に入るまで、2冊目は大学で働き始めた頃のこと書かれています。異国からアメリカに渡り、研究者への道を歩んだ先輩の物語を、親しみを持って何度も読み返しました。

もし3冊目があれば、おそらくスミス大学学長時代のことを書かれるはずですが、自分が学長になった今、ぜひとも“3冊目”を読みたいと思っています。



1986年頃、ペンシルベニア大学 TA オフィスにて

ひびや・じゅんこ ● 1980年上智大学外国語学部フランス語学科卒業、1982年同大学大学院外国語学専攻科言語学専攻博士前期課程修了。1988年ペンシルベニア大学大学院言語学専攻博士課程修了Ph.D.（言語学）。慶應義塾大学国際センター助教授を経て国際基督教大学日本語教育課程主任、教養学部語学科長、教学改革本部長、学務副学長等を歴任。2012年から現職。専門は言語学。